

【多文化共生 1】

日本語教育

【実践者】

氏 名	井土 恵美里	学校名	埼玉県立所沢西高等学校
担当教科等	国語	対象学年（人数）	3 年（選択 3 0 名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024 年 9 月 ～ 10 月（8 時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

日本語の表現（国語）

02 単元名と単元目標

単元名：日本語教育の観点から見る多文化共生

単元目標：多文化共生に配慮した日本語教育について理解する

関連する学習指導要領上の目標：学校設置科目のため特になし

03 単元の評価規準

① 知識・技能	日本語教育の概要について理解する
② 思考・判断・表現	・在日外国人と関わる上で意識しなければならないことは何か考え、配慮した行動ができる。 ・（在日外国人に関わらず）文化や価値観の異なる他者と関わる上で重要なことは何か考えられる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	グループワークに積極的に参加する。ワークシートの記入度合。

04 単元設定の理由・単元の意義

国際化に伴い、多様化する社会において、他者と共生するとはどういうことなのかを見つめ直して欲しいと感じたため、単元を設定した。

〈児童/生徒観〉

3 学年の自由選択科目なので、国語に対する意欲は高い生徒が多い。日本語教育への関心もあるようだが、日本語教育がどのようなものなのかの理解は乏しい。

また、生徒の人間関係の築き方を見ていると、他者への関心は決して低くないが、相手の個性を受け入れることが難しいように見える。「多様性」や「協調性」をただ自己に都合の良いものとして捉えてしま

うこともあり、他者との共生のための「多様性」や「協調性」として捉えることに困難を感じているようである。

〈指導観〉

ここでポイントにしたいのは「異文化理解」であって、「日本語教員」の養成ではない。「異文化理解」のために「日本語学習者の視点に立つこと」が必要なので目的がぶれないようにする。

05 単元計画（全8時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	途上国を知る	国際理解 →発展途上国の労働状況と、先進国である日本との関係性（ラナ・プラザ崩壊事故など）	・ バングラデシュの紹介 ・ 日本の高校生とバングラデシュの生徒の500円の価値の比較
	資料・教材など	プリント、アンケート、PPT	
2 3	日本語教育への理解	多文化共生 →日本に住む在留外国人とのコミュニケーションについて	・ 日本語教育（直接指導法）の概要理解、指導案作成 →・ 6、7時間目に主に3人1組でロールプレイングを実施。それぞれの場面設定は以下の通り。 ①地震発生 ②授業準備 ③体調不良 ④遊ぶ約束 ⑤食事場面 ⑥ゴミの分別 ⑦その他 →・ 与えられた場面設定に基づいて「話す」「聞く」の指導案を作成する。1人は日本語教師、1人は学習者、1人は共生者の設定。学習者はバングラデシュから来日した日本語初級者。ただし、設定に関しては生徒の意見を取り入れて各班柔軟に変更可。 ・ 指導案作成後、ジグソー法により指導案を深めていく。そのため、各班「自分と異なる文化的背景や価値観を持つ人と関わる時にどのようなことを考えますか」という軸で自分たちの指導案について別の班に説明できるようにしておく。
	資料・教材など プリント 教科書（みんなの日本語） 埼玉県の在日外国人数の統計 https://www.pref.saitama.lg.jp/a0306/keikakutoukei/r5-6toukei.html やさしい日本語について https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/92484001.html		
4 5	日本語教育の実践	①日本語学習者（異なる他者）の立場を慮る	・ 前時で作成した指導案を基に、場面や、立場をシャッフルしジグソー法で意見交換。感じた

		②「やさしい日本語」について理解する	こと、考えたことの共有。また、何を意識して指導案を作成したのか意見交換し、元の班で改めて指導案を作成する。 ・「やさしい日本語」の説明・理解をする。 ・「やさしい日本語」の内容を踏まえた上で、再度指導案を作成する。 ・必要に応じて、再度ジグソー法で意見を深める。
	資料・教材など	プリント、PPT	
6 7 本時	多文化共生 →在留外国人に関わらず、身近な他者との関わり方について学ぶ	これから自分と異なる文化的背景や価値観を持つ他者とどのように関わるのか考える	・主に3人1組でロールプレイングを実施。それぞれの場面設定は以下の通り。 ①地震発生 ②授業準備 ③体調不良 ④遊ぶ約束 ⑤食事場面 ⑥ゴミの分別 ⑦その他 ・何に気を付けたのか、どのようなことに苦労したのか、共有する
	資料・教材など	プリント、その他生徒各自で作成	
8	多文化共生 →在留外国人に関わらず、身近な他者との関わり方について、自らの考えを深める	在日外国人だけでなく、文化や価値観の異なる他者と関わる上で意識しなければならないことは何かを考える。	・プリントを通じて各自振り返り。 ・ペアワーク、グループワークを通じて考えを深める。
	資料・教材など	プリント	

06 本時の展開（6・7 時間目）

本時のねらい：多文化共生→在留外国人に関わらず、身近な他者との関わり方について学ぶ

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 10分 10分	前時の復習、本時の目的の紹介。評価の観点も提示する。 各班、発表の最終調整。	生徒の進捗状況を確認し、臨機応変に時間を動かす
展開 30分	【発表時間】10班×5分 →生徒役と教師役に分かれて発表を実施する。 スライド資料や、イラスト資料の使用は自由 【振り返り】10班×2分 →《発表した生徒》発表をする上でのこだわりポイントを伝える。 《発表していない生徒》プリントを用意。1班が終わるごとに時間を設け、振り返りを実施。1つ前に発表した班が、全体を代表して、振り返りを発表 or 質問する。	

発表→残っている班は6限に実施。5～6班は6限の予定。

30 分	5 限で終わらなかった班の発表と振り返り	プリントを用意。
まとめ 15 分	全体を通しての振り返り。 この時間で「異文化理解」に繋がたい（「多文化共生」は次時）。 自分の班の苦労したポイント・こだわりポイントと、他の班のこだわりポイントを比較した上で、文化の違う他者と関わるとはどういうことか、何に配慮すべきなのかを考える。 個人作業は10分ほど。 その後は、席を変えながらのペアワーク。	
5 分	まとめ。次時の確認。	

使用する資料・教材：

- ・プリント
- ・その他生徒各自で作成

07 板書計画

PPT を使用

08 評価規準に基づく本時の評価方法

発表評価シート、自己評価シート、総括プリントをそれぞれ点数化する。

09 学校外との連携（※該当のある場合）

特になし

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

アンケートにおいて、2 学期までの学習内容の中で自身の成長に繋がったと考えられる分野を聞いたところ30人中18人が「日本語教育」と回答しており、割合は1番多かった。実際に、アルバイト先で活用できたとする意見や、日本国内での外国人とのコミュニケーション言語として、英語だけでなく、日本語を活用するために「やさしい日本語」を研究する必要があるという意見があった。多様な文化についても否定から入るのではなく、受け入れる姿勢を持つこと、また、日本の文化を発信することも大切なのではないかという意見があがった。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

単純に「遠い外国での多様性・多文化共生」ではなく、「日本国内での多様性・多文化共生」を伝えるためにこの研修に参加した。実際、日本で生活するバングラデシュ人の方々にお会いし、交流できたことで、私自身も「日本国内での多様性・多文化共生」を実感することができた。生徒にも「日本国内で感じられる外国の暮らし・価値観」を伝えたいと思っていたことはもちろんのこと、日本国内で生まれ育った人同士の間にも、異なる価値観があることを伝えたいと思い、授業を組み立てた。

12 苦労した点

- ・聞き馴染みのない「バングラデシュ」という国に対して、生徒が身近に感じるにはどうすれば良いか創意工夫した点。
- ・「日本語教育」に対しての興味関心を持たせる点。

13 改善点

- ・10 班全ての発表を行ったので、少し間延びしてしまう感覚があった。
- ・発表の評価シートを紙媒体で行ったため、集計が非常に大変だった。
→Google フォームでの回答にすべきだった。
- ・総括プリントや、学期末のアンケートからは、学びが深まり、生徒の成長に繋がったことがよくわかった。そのような意見や学びを共有、深める時間をもっと多く取れば、さらに学びが深まったかもしれない。

14 成果が出た点

- ・普段当たり前のように使っている日本語について、新しい角度から捉えることができたという意見があった。
- ・他者との関わり方について、改めて見つめ直すことができたという意見を出した生徒が多かった。また、他者との関わり方は、海外の人と交流する際にのみ必要なことではなく、日本人同士の交流でも必要だと感じたという意見も多く、当初の目標は達成できたといえる。

15 自由記述

実際に授業をするまでは、2 点不安があった。1 点目は、「日本語教育」という生徒にあまり関わりのない分野の学習について、生徒自身が興味を持てるのかということである。2 点目は、「外国人と関わる上で大切なこと」で終わることなく、「日本人同士で関わる上でも大切なこと」という気づきに持っていけるのかということである。しかし、授業後のプリントやアンケートからは、「日本語教育」への興味がわいたことや、対人関係で注意しなければならないことなどについて、授業を踏まえた上で、生徒なりに考えられていたようで、安心した。今後も、「生徒の興味関心のある分野」と「生徒が社会で生きる上で必要なスキルの分野」のすり合わせを丁寧に行い、学習前に興味があるかないに関わらず、よりよい学びができるように授業を工夫したい。